

佐野静代 著

『中近世の生業と里湖の環境史』

吉川弘文館 2017年4月 346頁 9,500+税

今や「環境」という言葉は、私たちの日常に満ち溢れている。本書の依頼を受けた時、私は環境学の学生となって読んだ論稿をすぐさま思い出し、読み返した。著者は、多岐にわたる環境史研究について、論点の整理を行っており<sup>1)</sup>、近世の景観研究を出発とした私は多くの示唆を得た。

著者は、日本の歴史地理学において、水田農耕以外の多様な生業によって形成される景観への関心は、相対的に低かったと指摘している。また、生業に伴ってあらわれる「二次的自然」の形成と変化のプロセスを、景観を素材に今後検証することが、今後の焦点となるとした<sup>2)</sup>、その成果が本書である。

著者は、「二次的自然」の観点から琵琶湖が「里湖」として形成される要因とプロセスを、可能な限り長期的な時間軸のなかで検証したものとする。

構成は、序章以下、4部に2編の補論を加えた大著である。中世史をベースとしながらも、それにとどまらない広範囲な分析が展開される。歴史地理学・自然地理学の観点はもちろんのこと、古代から近現代を射程に入れた歴史学、民俗学、さらには植物学など、評者にはかなり難解な内容であった。そこで本書の意図をくむために、章以下の節まで紹介して生体を展望し、理解に必要な基本的な語句説明を加えていく。

序章は、日本の環境史研究の課題と本書の視座として6節にわたり、研究の意義と分析の視座、既往研究史の整理と現時点の課題が述べられている。

- 1 日本における「二次的自然」研究の意義
- 2 水辺の「二次的自然」としての「里海」
- 3 本署の視座と「里湖」研究の意義
- 4 都市と淡水魚の消費—ヨーロッパ中世都市との比較から
- 5 複合生業論・コモンズ論と「里湖」の環境史
- 6 世界の環境史研究における日本の位置

「コモンズ」は「入会地などのように共同で利用・管理される土地」のことである（『広辞苑』、以下の説明はこれによる）。本書に多用される語句であるがゆえ、定義がほしかった。研究史の整

理や論点の構築という点で、本書の根幹を構成する章である。

本文は以下の構成となる。なお各章毎の「はじめに」「おわりに」は論点理解の助けとなった。

I 水辺の資源とコモンズ

第1章 古代の淀川流域におけるヨシ群落利用と管理

- 1 抽水植物の用途と有効性
  - 2 「依り代」としての抽水植物
  - 3 ヨシ群落と稈・牧
  - 4 ヨシ群落と中世的水面領有
- まとめにかえて—ヨシ群落の維持と管理

第2章 「水辺」のコモンズとしてのヨシ帯

- 1 ヨシ帯の資源価値と入会
- 2 荘園・惣村によるヨシ帯の利益
- 3 ヨシ帯の所有と支配

II 中世村落の生業と景観

第1章 琵琶湖の自然環境からみた中世堅田の漁撈活動

- 1 中世堅田の漁撈技術と小糸網
- 2 中世音羽庄と堅田との争論
- 3 中世菅浦と堅田との漁業争論
- 4 考察—琵琶湖の水深構造と漁場

第2章 琵琶湖の「杓の銭」と中近世の堅田・菅浦

- 1 堅田から尾上への「運上」
- 2 菅浦と尾上の「かへ地かへ海」
- 3 菅浦の領海の範囲
- 4 竹生島神領と「杓の銭」

第3章 惣村菅浦の集落景観と自然環境

- 1 「ハマ」と水面
- 2 湧水・水系と「東村」「西村」
- 3 河川と山麓荒廃

補論1 近代以降の菅浦と漁業とその背景

- 1 忘れられた明治期の漁場
- 2 「網浦」と村のコモンズ
- 3 戦前のエリと戦後のエリ

III 漁撈技術と資源管理

第1章 近世・近代史料による琵琶湖のエリ発達史の再検討

- 1 図像史料にみる近世のエリ
- 2 漁撈装置からみたエリの分類とその発達

過程

3 エリの発達の地域的要因

第2章 内水面「総有」漁業の近世と近現代

1 前近代漁業慣行と内水面の資源管理

2 琵琶湖の「総有」のエリ

3 明治初期のエリの変容と乱獲

4 「村エリ」による収益配分と村落の社会構造

5 「総有」エリの過去と現在

補論2 「安治区有文書」天正十六年「魴銭集日記」「鮭上納日記」に関する一考察

1 橋本氏による批判とその論点

2 「安治村の「村エリ」の実態

3 「鮭上納日記」の理解

4 神事魴」の位置

5 フナに関する民俗語彙と史料解釈

IV 「里湖」と都市の消費活動

第1章 近世近江国南部における「里山」と「里湖」の循環システム—漁撈死かたの環境史研究の可能性—

1 蜆漁と田上山地の荒廃

2 採藻業と商品作物

3 考察

第2章 「里湖」の生態系と近世都市の消費生活—琵琶湖と京をめぐる—

1 水生植物の利用・管理

2 都市での水産物消費と「里湖」

I部第1章の目的は、人間と水辺空間との関係史の解明である。淀川流域及び琵琶湖沿岸地域の、水陸移行性の代表的植生である「ヨシ群落」を取り上げる。「抽水植物」とは、浅水に生息し根は水底に存在し、茎・葉を水上にのばす植物をいう。抽水植物は、古代の朝廷や祭祀に関わる編み物である「依り代」や牛・馬などの肥料である「秣」にも活用された。第2章では、「水辺」と「水際」の二語の違いを明確にしつつ、古代から近世のヨシ帯の管理・利用形態の推移を述べている。

II部は、多くの研究の蓄積がある近江国堅田・菅浦を取り上げる。第1章では中世前期の漁撈活動の実態を、湖底地形や魚類の生態行動などの琵琶湖の自然環境と、堅田の漁撈技術段階を照合した。この方法論は他の湖沼や海域でも有効性を持つと提言している。第2章では18世紀の地誌書に

記された堅田からの入漁料である「杓の銭」が中世に起源がある可能性を提起している。第3章の菅浦では、中世惣村の代表的史料「菅浦文書」を、菅浦周辺の自然条件を把握した上で読み直している。現在の菅浦の集落景観は中世からの生活基盤が引き継がれている推測し、聞き取り調査を試みている。昭和50年代前半まで湖岸側に築かれた強固な石垣の先には、幅数メートルの小規模な礫浜があり「ハマ」と呼ばれた。「ハマ」には、杭上の木材が立てられ、稲を干す「ハサ杭」が立てられた。また調査の結果、中世惣村の根底をなす「東村」と「西村」地域で利用する水源が異なることを突き止め、自然環境からのアプローチがなお有効だと指摘する。補論1の「エリ」とは、定置漁具の一種である。魚の通り道に細長く屈曲した袋状に竹箆を立てて魚を捕える仕掛けのことである。

III部は、琵琶湖の伝統業法である「エリ」発達史の再検討と要因の解明である。この背景には「フナズシ」の理解も必要である。近代以降は図表も多く、地域別のデータもあるので、比較的読みやすい章であった。補論2は、橋本道範氏との史料の解釈の違いという点で一読されたい<sup>3)</sup>。

IV部は、著者の環境史視点に基づく問題提起の章である。山地・平野・海(湖)を河川でつなぐる流域ととらえ、その環境変化を長期的な時間軸において問い直す視点である。琵琶湖埼狭部以南の水域をフィールドとして設定し、近世の蜆漁と採藻漁について論じている。田上山地は、日本の砂防の拠点として著名である。田上山地の「土砂止」施工によって、里山からの草肥需要の補完したのが、琵琶湖のセタシジミ貝灰と藻草であった。

「環境史」の範疇は実に広い。琵琶湖を中心に展開されるさまざまな視点と手法を統合した本書から学ぶものは実に大きい。

(橋本直子)

〔注〕

- 1) 佐野静代「日本における環境史研究の展開とその課題—生産研究と景観研究を中心として」史林89-5, 2008, 89-126.
- 2) 佐野静代『中近世の村落と水辺の環境史』吉川廣文館, 2008.
- 3) 橋本道範『日本中世の環境と村落』思文閣出版, 2015.